

横浜市内で発見されたベーツヒラタカミキリ をめぐって

新堀 豊彦・高桑 正敏・新井 一政

A Note on *Euryoda* (*Neoprion*) *batesi* GAHAN (Coleoptera,
Cerambycidae) Occurring in Yokohama City

Toyohiko SHINBORI, Masatoshi TAKAKUWA, and Kazumasa ARAI

ベーツヒラタカミキリ *Euryoda* (*Neoprion*) *batesi* GAHAN はインドシナから日本の暖地にかけて分布し、太平洋側では茨城県の記録が北限となっている。しかし、実際上は神奈川県を棲息の北限と見なしても差支えない。その神奈川県においては、真鶴半島(露木・小田:1977)、伊勢原市(露木ほか:1981)、逗子市神武寺(青柳, 1939; 周布, 1938; 露木ほか, 1981)、鎌倉市と葉山町浅間山(草間:1954)から記録があるが横浜市内からは知られていなかった。ところが、1982年に市街地の多い南区において続けざまに2頭が採集され、またその後若干の知見も得られたので、ここに報告しておくことにする。

1♀, 横浜市南区勝国寺, 13. VIII. 1982, 佐伯真魚採集(図1左個体); 1♀, 同若宮町, 18. VIII. 1982, 浦島嘉子・新堀秀子採集(図1右)。

後者の個体は新堀の自宅前の側溝の中で裏返しになってもがいていたもので、おそらく灯火に飛来した後なのであろう。前者の個体は同年8月29日の神奈川県立博物館の標本鑑定会において新井が確認した。

本種の幼虫はシイ類 *Shiia* の枯死部を好んで食し、成虫は明るい間は彼らの飛孔(脱出孔)などに潜み、夜間に出てきて主にシイ類の枯死部を徘徊する。したがって、本種は通常スダジイを主体とした自然林に棲息するが、そのような林に乏しい現在の横浜市内にあっては、本種の棲息は難しいものと思われていた。この点で、今回の記録はきわめて意義深いものである。

一方、2つの採集場所は、住宅密集地ないしはそれに隣接しているが、いずれも背後にシイタブ林の自然植生を多少とも残しており、それらの林で発生しているものと見なされる。実際、若宮神社の社叢中のスダジイ立枯れと生木の枯死部において、明らかに本種と思われる飛孔が認められ(8月21日, 高桑), また

勝国寺裏の寺林においても飛孔が見出された(8月29日, 高桑・西村正賢)。さらに、同区内の宝生寺(8月29日, 高桑・西村)や根岸八幡神社近く(8月22日, 秋山秀雄)においてもスダジイ立枯れ木から同様の飛孔が認められたし、金沢区でも高桑は富岡神社で古い飛孔を1979年頃に確認している。ただ、これらの飛孔は根岸八幡神社近くの一部を除けばいずれもかなり古いものだから、少くともその年に発生したものではない。

これらの点から、市街化が進んでしまった横浜市内においても、急傾斜地や社寺林として多少とも自然植生のシイ林が残されていれば、本種が棲息しているかあるいは近い過去に棲息していた可能性がある。本種の成虫の発見は、偶然的なものを除けば、盛夏(逗子市神武寺では8月中〜下旬が最盛期)にスダジイの立枯れ木を夜間に見回ることが一般的だが、難しい面も

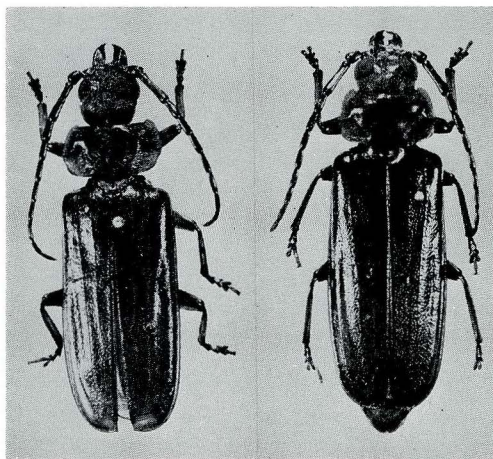


図1. ベーツヒラタカミキリ♀ 左・横浜市南区勝国寺, 右・同若宮町

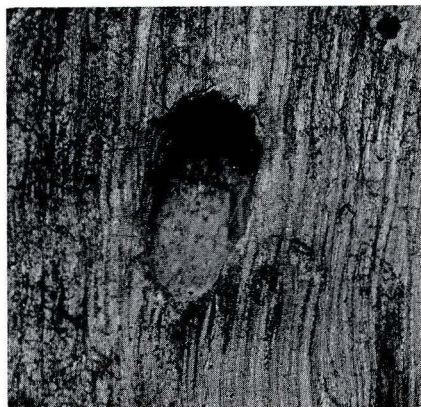


図2. ベーツヒラタカミキリの飛孔・若宮神社



図3. 成虫採集地点(●印)および飛孔確認地点(■印)。地図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「横浜西部」「戸塚」を使用した。

多々ある。むしろ、棲息の有無だけを確認するのであれば、明るい間に飛孔を探した方がよい。図2に示したように、本種の飛孔は縦に長い楕円形(長径10—14 mm 内外)を呈することで特異的であり、他のもの、例えばシイ(生木)も加害するミヤマカミキリ *Massicus raddei* (BLESSIG) の飛孔も長径がほぼ10mm以上と大きい、通常は横に長い楕円形であるから、すぐに区別できる。ベーツヒラタカミキリの飛孔が最近のものか、古いものかについては、一般的には孔道壁面と孔道の外(幹上)の色彩から判断できる。すなわち、両者の色彩がほぼ同様であればより古く、孔道壁面の方が黄色がかかるほど新しい。

宮脇ら(1973)によれば、潜在的には横浜市の特に海岸近くにおいてはシイタブ林が発達していたと見なしてよい。おそらくベーツヒラタカミキリは、その林分に広く分布していたことであろう。しかし、人為による介入が、急傾斜地や社寺林など一部を除けば、シイタブ林の存続を許さなかったことで、この昆虫は今や残存的にしか分布していないものと予想される。林内に棲息し、決して林縁的でないという本種の習性も災いしたに違いない(つまり、二次林への進出が難しい)。

このことを逆に言えば、本種が棲息する林分は自然度の高いシイタブ林と見なすことができるだろう。さらには、いくら自然度の高い林分とは言え孤立したものであれば、その面積が小さいほど本種の存続を許さないに違いないから、現在も棲息しているということは、生物環境の面でもより自然度が高いと言える

る。

ベーツヒラタカミキリは飛孔の調査から容易に棲息が確認できるという利点もあるので、本種を1つの指標としてヤブツバキクラス域の林分の生物環境度を推定する試みがなされることを期待したい。

末尾ながら、この小文を記すにあたり協力いただいた佐伯真魚、西村正賢、秋山秀雄の各氏に心からお礼を申しあげる。

文 献

- 青柳鷹之介 1939 鎌倉・逗子・葉山で採れる珍甲蟲. 昆蟲界, 7 (65) 420—421.
- 草間慶一 1954 三浦半島中北部の天牛について. INSECT MAGAZINE, (31) 5—14.
- 宮脇 昭 1976 神奈川県内の潜在自然植生. 神奈川県教育委員会.
- 周布吉兼 1938 ベーツヒラタカミキリを採集す. 昆蟲界, 5 (46) 57.
- 露木繁雄・小田義広 1977 三浦半島神武寺でベーツヒラタカミキリを再発見. 甲虫ニュース, (37) 5.
- ・新堀豊彦・窪田勝信・高桑正敏 1981 神奈川県産カミキリ目シ目録, 神奈川県昆虫調査報告書: 419—454. 神奈川県教育委員会.

(新堀豊彦・高桑正敏: 日本鞘翅目学会, 新井一政: 神奈川県立博物館)